

## 「手習い」イギリス文化論

第6回

## 「ことば」から手繰る

(独)日本学術振興会 特別研究員(酪農学園大学酪農学部所属)

小林 国之

「イギリス」はどこ？

目の前に「イギリス」の地図を広げている。グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国という正式名称を持つこの国は、イギリスに関する観光ガイドブックから学術書までが等しく指摘するように、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランド、の四つからなる連合王国 (United Kingdom) である。日本人がポルトガル語でイングランドのことを指す「Ingelz」が語源の「イギリス」という「日本語」をつかって表現しているこの国は、内部に複雑な構造を持っている。たとえば、日本近代化のお手本となった様々なものが、実際にはイングランドではなくスコットランドからもたらされていた。明治維新に大きな影響を与えたグラバーはスコットランド東部にあるアバディーン出身(父はイギリス人、母がスコットランド人)であり、若き日の井上馨や伊藤博文もそこを訪れている(坂本龍馬も密かに訪れていたという説もある)。ニッカウンスキーの創設者である竹鶴政孝が留学したのは、スコットランドのグラスゴーである。この連載も「イギリス文化論」といいながら、今までは「イングランド」文化論であった。今回は「言葉」を手がかりに、ちよつとだけ他の王国にも足を伸ばし

## 小林 国之(こばやし くにゆき) 氏

1975年 北海道に生まれる  
2003年3月 北海道大学大学院農学研究科博士課程後期課程修了(博士(農学))  
その後、北海道大学大学院農学研究科研究員を経て  
2004年4月 日本学術振興会特別研究員(酪農学園大学酪農学部所属)  
(2005年4月~2006年10月 Exeter University、Centre for Rural Researchの  
客員研究員)

### ◆主な著書

『『農協と加工資本』〜ジャガイモをめぐる攻防』(株)日本評論社 2005年

てみよう。

日本人が「イギリス」、と言うとき、なにもそれはイギリスの連合王国としての実態を意図的に無視している、のではない。言葉は、必要に応じて生み出され、またその言葉を介してしか人は現象を認識できない、という関係にある。日本人にとって、イングランド、が語源のこの「イギリス」という言葉があれば、彼らとつきあう上では事足りたということであろうか。

◆ ◆ ◆  
例えば日本人は魚について実に豊富な言葉をもっている。しかし、多くのイギリス人にとって魚は「白身と赤身くらい」の区別しか必要ない、と私の友人はいつていた。イギリス人にかぎらず、子供の頃魚介類があまり好きではなかった私のなかでは、回転寿司で悩んだフリをしながら注文するヒラメも鯛も実はいまだに「白身魚」である。

ところが、イギリスの代表的料理であるフィッシュアンドチップスに使う白身魚については、お店によっては、コッド(cod)とハドック(haddock)という二種類のタラを使い分けている。コッドはいわゆる鱈であり、特に北大西洋産のニシマダラを指す。一方ハドックは鱈の一種のモンツキダラを指す。肝心の味の違いは、というと、好みの問題もあるうがハドックの方がやや淡泊な感じだ。私の味覚でわかるのはこれぐらいでした。

◆ ◆ ◆  
 日本が江戸時代末期にはじめて出会ったイギリスは、すでにイングランドを中心とした「大英帝国」の姿を備えていた。日本人にとってスコットランドやウェールズといった区分は必要なかったであろう。

## お国自慢

では日常生活のなかで「連合王国」としてのイギリスはどのように現れてくるのであろう。まずは身近なところからみてみよう。私の住むエクセターでもスコットランドのラグビーナショナルチームが試合をする日には、スコットランドのキルトをきた若者たちを見かける。パブのテレビで放映される試合を観戦・応援するためだ。サッカーでは、この間日本人の中村俊介が所属するスコットランドの大人気チーム「セルティック」が、これまたイングランドの大人気チーム「マンチェスター・ユナイテッド」と試合をした。試合を見ようといった「イギリス人」で埋まっていたもののパブは、中村選手がゴールを決めた瞬間に、「イングランド」と「スコットランド」に真二つに分かれた。落胆するイングランド人と対照的に、大喜びするスコットランド人と、一人の日本人であった。

◆ ◆ ◆  
 熱狂を生みやすいスポーツの世界から離れてみてみよう。

各国にはそれぞれ、独自の言葉が存在している。スコットランド、北アイルランドではゲール語、ウェールズではウェルシュが使われている。また、現在ではほとんど使われていないが、私の住むデボン州の隣、コーンウォール州もコーニッシュという独自の言葉がある。イギリスの隣のアイルランドも公用語としてゲール語を採用している。これらのゲール語、ウェルシュ、コーニッシュという言語は、ブリテン島の先住民であったブリトン人やケルト人たちが使っていたケルト語の流れをくむものである。

スコットランドではゲール語は現在ほとんど使われていない。スコットランドでも北部「ハイランド」に行かなければゲール語を使っている人たちにはほとんど出会わないらしい。北アイルランドでも交通標識などにゲール語は見られるが、実際話されている言葉は英語がほとんどである。スコットランドや北アイルランドではそれぞれ訛りのある英語が話されている。スコットランド訛りを聞いてみたいという人には映画「ブレイブハート」がおすすりである。十三世紀末、悪政に苦しむスコットランドの独立と開放を目指して戦った実在の英雄、ウィリアム・ウォレス（メル・ギブソンが演じる）の生涯を描いた映画

である。

地図をみると、独自の言葉が残っている地域はブリテン島の端に位置していることがわかる。ヨーロッパ大陸から侵攻してきたローマ人やノルマン人に追いやられながら、そうした言葉が「周辺部」で生き残ってきたのである。映画「キングアーサー」には、ローマ人、ブリトン人、そしてサクソン人の間の攻防が描かれており、その当時の様子をうかがうことができる。円卓の騎士で有名なこのアーサー王は、コーンウォールの出身ということになっている。

ケルトには、「ケルト神話」にみられるように、樹木信仰、アニミズム（精霊崇拜）的世界観、輪廻転生など、独自の文化を持っていた。イギリスのこれらのいわゆる周辺の地域にいくと、いまでもイングランドとは違う、自然への信仰心、共同体としての結び付きの強さなど、独特の雰囲気を感じることができ

◆ ◆ ◆  
御国自慢的な「地域愛」はこの国のなかにもみられるが、スコットランドはなかでも特に独自色がつよい。スコットランドは、人口が五一〇万人（英国全体の八・六％）、面積七八、一三〇km<sup>2</sup>で英国全体の三二・二％をしめている。人口、面積と

◆ ◆ ◆  
もに北海道とほぼ同じ大きさである。このスコットランドという国の歴史は実に興味深い。長い闘争で彩られた中世を経て、一七〇七年にスコットランドはイングランドに併合された。その後イングランドへの恨みをうちに秘めながらも十八〜十九世紀にかけて、大英帝国の産業革命という大舞台でスコットランド人は主役を担った。経済学の父といわれるアダムスミス、哲学者ヒュームなどの哲学・思想界をはじめ、蒸気機関を発明したワットなどの実業界、それに世界最初のベストセラー作家といわれ個人をたたえるモニュメントとしては世界最大といわれる記念碑のあるウォルタースコット、などなど、キラ星の如く



人材が輩出された。

◆ ◆ ◆  
 当時のイングランド人とスコットランド人の関係性を物語るよく知られたエピソードがある。イングランドで編纂された百科事典の「カラス麦」の項目の説明に「カラス麦はイングランドでは馬の飼料だが、スコットランドでは人間が食べる。」と書いた。これは、小麦を食べることができない貧しいスコットランド人を皮肉ったものであった。しかしこれに対してスコットランド人は、「ゆえに、イングランドの馬は優秀で、スコットランドでは人間がすぐれている」とやり返した、というものである。スコットランド人のユーモアと自尊心が伺えるエピソードである。

◆ ◆ ◆  
 さて、こうして大英帝国に組み込まれてから三百年以上経っているのであるが、今でもスコットランドはイギリスのなかで独自の地位を占めている。象徴的なものの一つが紙幣である。スコットランドでは、民間銀行も紙幣を発行しており、イングランドとは異なる数種類の紙幣が流通している。もちろんイングランドの紙幣も通用するが、スコットランド銀行やその他の銀行が独自の紙幣を発行しているのだ。以前スコットランドからイングランドの片田舎である地元のエクセターに戻った私は、

パブでビールを頼んだあとポケットに入っていたスコットランド紙幣をカウンターのスタッフに渡した。彼女は受け取るなりあからさまに怪訝な表情を浮かべて、私をいぶかしげにみた。どうやらその紙幣はスコットランドのなかでもあまり流通していないものらしく、近くにいた偶然スコットランド出身のスタッフがいなかったら、わたしは偽札使用の疑いをきせられるところであった。

◆ ◆ ◆  
 スコットランド人のナショナルリズムは近年高まりを見せつつある。一九九九年七月にスコットランド議会が三百年ぶりに再開されている。地方分権が始まり、地方自治体、教育、保健、住宅などあらゆる生活関連の責任を単独で負うこととなっている。そのことがすぐにスコットランドの独立、ということにつながると思えないが、経済のグローバル化と地域への意識、その相反する二つの流れが生み出す世界規模でのあらたな潮流は今後の重要なキーワードであることをあらためて感じざるをえない。

◆ ◆ ◆  
 一方他の連合王国のひとつであるウェールズでは、現在でも人口の約二二%の人々がウェールズ語をしゃべっている。テレビでもウェールズ語専門のチャンネルがあり、道路標識などは英語とウェールズ語の二重表記となっている。公的機関に電話

すると、まず最初にウエルシュで話しかけてくる。

ウエールズは、一二八二年にエドワード一世（イングランド王）に破れ、イングランドの支配下に置かれた。そのときエドワード一世は長男エドワード（エドワード二世）にプリンス・オブ・ウエールズ（ウエールズの王子）という称号を与え、ウエールズ人との融和を図ろうとした。その習慣は現在まで引き継がれており、チャールズ皇太子は「プリンス・オブ・ウエールズ」と呼ばれている。ウエールズにも一九九七年から独自の議会が置かれているがスコットランドや北アイルランドと比較して、政治経済的面から見るとイングランドに対する依存が強い。しかしその一方で、ウエールズ人としてのアイデンティティーは非常に強いといわれている。

イギリスでは数年前から人気のテレビ番組に「ビッグブラザー」というものがある。これは、公募された一般人十数名が、特別に設けられた建物の中でおくる「監禁生活」を二四時間態勢で中継する、というものである。いろいろな使命をこなしながら、毎週一名が、視聴者の投票で「退去」させられる。そして最後に残った人が賞金を手にする、というなんとも「下品」な番組である。この「下品さ」加減が癖になり、つい時間になるとチャンネルを回してしまうのであるが、今年この番組に二人のウエールズ出身の若者が出ていた。その二人がウエールズ

語で会話をするシーンが時々放映されていた。実際に彼らのような若い人たちが自分たちの言葉でしゃべり、常にウエールズ人としての誇りを口にする姿は、イギリス人にとっても新鮮に映ったようである。

### 階級とことば

言葉というものは、文化、歴史の積み重ねの上に作り上げられているものであり、同時に、アイデンティティーにとって重要なものである。他のグループから自分を区分し、同じグループ内での団結を強める。言葉は、自分が何者なのかを表現する重要な役割を担っている。例えば、階級、出身地、価値観までも示すことができる。

イギリスは、「連合王国」という「込み入った」構造の他にも、もう一つややこしい特徴を持っている。それが「階級」といわれるものだ。これは実にやっかいなものである。「階級」は職業でも、出身地でも、所得でも、そのどれか一つで決まるものではない。そして、それぞれの階級毎に使う言葉やアクセントが異なるのである。

◆ ◆ ◆  
“Watching the Englishness”という本は社会学者が「イン

「グランド人らしさ」について、様々な視点から紹介したものだ。この本によれば、階級によって、日常使う言葉も微妙に異なっているのだ。例えば、食事の呼び名である。われわれが学校で習った英語では、「昼食」は当然「ランチ」であるが、ワーキングクラスの人たちはこれを「ディナー」と呼ぶ。また、「居間」のことをリビングと呼ぶのはミドルクラスの人たちでワーキングクラスの人たちはラウンジと呼ぶ。この本には言葉以外にも服装や食事、など様々な視点から階級というものを教えてくれて、興味深い。

服装でも、夏の暑い日にワイシャツを肘から上までめくるのはワーキングクラスで、ミドル、アッパークラスの人々はめくつたとしても肘から下までらしい。いくら何でもそんなことないだろうと思ひ、イギリス人の家庭教師に聞いてみたら「おかしいかもしれないけど、本当よ。」と教えてくれた。この階級意識というやつは、無意識的にイギリス人の生活に広く入り込んでいるのである。

◆ ◆ ◆  
ところで、日本人は学校でアメリカ英語を習うので、なじみがあるのはアメリカ英語（米語）である。イギリスで話されている「英語」との間には、使う単語や、発音に違いがある。私も渡英前には、そんな違いなど気にもしていなかったが、こち

らについてからに暫くして、アメリカ英語の発音と、イギリス英語の発音の違い気がついた。「そんなの簡単だ」、と周りの友人知人は声をそろえるが、そのときはちよつと自分が成長した気がした。簡単な違いというと、単語ではガソリンのことを米語では「ガス」、英語では「ペトロール」、飲食店などのお勘定は米語では「チェック」、英語では「ビル」。イギリスに行つて、レストランなどで勘定を頼むときに「チェックプリーズ」でも通じるが、「ビル、プリーズ」というと何となく誇らしい気分になるので、おすすめである。

発音でいえば、「R」の違いが顕著である。DOORのことを米語では「ドオア」という感じで最後に舌を丸めるが、英語では「ド」である。また、比較的各子音をはつきりと発音するので、日本人にとっては「英語」の方が聞き取りやすい。今度テレビでブッシュ大統領とブレア首相が並んで会見する際に、少し意識して聞き耳を立てるとすぐに違いに気づかれるとおもう。

◆ ◆ ◆  
では「英語」とは何だろうか。イギリスには、日本でいう標準語に当たるものとして、クイーンズイングリッシュ、あるいはBBC（イギリス国营放送）イングリッシュと呼ばれるものがある。ところが、標準語としてのこれらの言葉をはなす人、というのはごく少数である。また、標準語とはなにか、という

問題もある。もともとクイーンズイングリッシュといつても、クイーンの出身地であった一地方の方言がもとになっているものである。

◆ ◆ ◆

では実際にはどんな英語を人々はしゃべっているのであろう。各地方にはそれぞれ方言があるが、ロンドン近郊に限って階級との関係でいえば次の三つに分かれるらしい。上流階級といわれる人たちがしゃべる「気取った」クイーンズイングリッシュ（日本でいえば山の手言葉）、労働者階級の人たちのコックニー（下町言葉）、そして、クイーンズイングリッシュよりも気取ったところがないといわれる、主として新興の中産階級の人たちがしゃべるエスチュアリー（河口域）英語である。それぞれ代表者に出てもらうと、順番に、エリザベス女王、サッカー選手のデイビット・ベッカム、そしてトニー・ブレア首相である。なかでも、エスチュアリーイングリッシュはテムズ川の河口域一帯で話されてきた言葉であるが、最近ではそれが新標準語としての地位を獲得しつつあるそうだ。

◆ ◆ ◆

私のいる研究所でも、実に様々な英語が話されている。三人いるディレクター（理事）のうち二人や、そのほか五十才代後半から六十才代の年配の研究者達は、訛りもほとんどないわ

ゆる標準語に近い英語を話す。彼らの英語は外国人である私にも聞きやすい。一方、一般化できるかわからないが、比較的若い世代になると地方色が豊かになってくる。中堅の四十代のディレクターは、ロンドンの東の地域出身であり、下町言葉に近い英語をしゃべる。最近テコンドーで昇段を果たした彼の口からは、年配の研究者達からはほとんど聞かれない、いわゆる「汚い」言葉もしばしばでてる。研究室をシェアしている今年四十才になった同僚の使う英語はイングランド中西部訛りの抑揚の少ないフラットな英語である。早口なこともあり、今でも聞き取れないことがしばしばある。ついでにもう一人、毎日朝のティータイムを私の研究室で過ごす「クリナー」（清掃係）の八三才のドナルドは、見事な「デボン訛り」の英語である。おしゃべり好きな彼は、私のことをいつも気にかけてくれる大切な友人だ。

◆ ◆ ◆

言葉が自己表現にとって重要な役割を果たすことから、それを主体的に利用して、自分をアピールすることもできる。エスチュアリーイングリッシュをつかうトニー・ブレアはスコットランドの首都エディンバラの出身である。貴族の家系出身である保守党党首のデイビット・キャメロンも、中産階級の人たちに親しみを持ってもらおうとして、意識的にエスチュアリーイ



ングリツシュを使っているということである。キャメロンはそのほかにも、議会へ自転車で通勤する、というパフォーマンスもおこなっている。政治家という商品としての自分を売り込む、マーケティング戦略の重要な一つとして言葉遣いが位置づけられている。

◆ ◆ ◆  
 こうしてみてみると、言葉というものは自分が何者であるのか、ということを経済的に物語るものであることに気づく。日本に生まれて日本語しかしゃべることができない私にとつて、これは興味深い発見であった。「文は人なり」というが、同じく、いやそれ以上に「言葉は人なり」である。果たして自分は普段どんな言葉で話しているのだろうか。

## 「ことば」をみつめる

他の文化、価値観と出会う機会が増えれば増えるほど、自分は一体何者か、という自己意識に関する関心は強まるのだろうか。現代はいわゆる「グローバル化」の時代である。いろんな価値観が流れ込むなかで、自己意識を再確認する作業にとつて、言葉というものが重要な役割を果たすような気がする。様々な価値観が存在するなかで、重要なことは、互いの価値観を尊重し

ながら、それでも奥底では分かり合えるという希望を持ちながらコミュニケーションをしていくことだ。

◆ ◆ ◆  
 地域農業の多様化がいわれて久しい。様々な価値観を持った人たちが地域には存在している。現在EUがおこなっている地域振興政策のなかで、地域のアイデンティティーの確立、発見といったことが大きな柱として位置づけられている。そして、そのアイデンティティーの構成要素として「ことば」も重要な役割を果たしているのである。最近の研究でも、地域振興の成功事例といわれているもののなかでも、「言葉」や「方言」を地域再生戦略の根幹として位置づけたものが多いということが指摘されている。同じ「言葉」を共有する人たちがあつまり、地域の言葉（方言）を見直すことで地域の個性を認識することにつながる。それがきっかけとなっていろいろな活動へと広がっていくのである。

◆ ◆ ◆  
 日本にも多様な言葉がある。特に北海道にはアイヌの言葉をはじめ内地からやってきた人たちがそれぞれの御国から持ち込んだ言葉がある。今は「北海道弁」といわれるようになった言葉が、一体どのように生まれてきたのか。北海道弁を母国語とするわたしにとつて、イギリスにきて、また一つ帰国してから勉強してみたい課題がみつかった。